

私の場合

K.Y

私がおかしいと気づいたのは、暴力被害を最初に受けてから、もう何年もたってからです。精神科の医師には、解離性健忘症といわれています。成人になって以降の記憶はわりと連続していますが、それ以前のものに関しては断片的です。

最初に記憶も自覚もできた被害は、19歳のときのものです。知らない男性の車に乗せられ、車中でレイプをされかけました。おそらく普通なら、慌てたり驚いたりする状況のはずですが、なぜだか私はその雰囲気をよく知っていて、慣れたものだと感じていました。レイプされることをすっかりあきらめて、『早く終わらないかな』と落ち着いた気持ちで、のしかかってくる男性の肩越しに月を見ていました。そのときは男性がズボンのファスナーを下ろすのに手間取ったので、その隙に顔面を殴って逃げ出すことができました。ただ、それ以来、ぼろぼろと思い出すようになりました。

6歳のときは知らない若い男性に、近所の温水プールの男性更衣室内にあるトイレの個室に連れ込まれ、水着を脱がされ裸にされて（彼の顔に向かって）小便を出すように要求されたことがありました。要求どおりに小便が出なかったので泣きましたが、男性に裸になるよう命じられることは、抵抗がありませんでした。なぜだか良く知った慣れた命令でした。

中学生のときも、理由はわかりませんが男子生徒数人に輪姦されそうになり、抵抗しませんでした。その理由もなぜだかわかりませんでした。そうされることは仕方のないことで、当然のこのように思えました。

ある日、自分の性器周辺の灼熱感に堪えられず、気が狂いそうに痒くて、もうどこがどうかゆいのかもわからなくなって転げまわって涙を流したことを思い出しました。これは頭が覚えていたというのではなく、体が体の持っている記憶を思い出したような感じでした。そして、私は医者に行き、飲み薬と塗り薬をもらったのでした。私はまだ幼稚園でした。

家庭内で自分がレイプされるシーンを画像として鮮明に思い出すようになりました。そうであっても、しばらくの間、どうしても信じられませんでした。私に覆いかぶさる相手は、父親でした。何度も違うと、自分の記憶が間違っているのだと思おうとしても、父親でした。そして、それは小さいころから大きくなるまでずっと続いていて、私はそれに抵抗したことはありませんでした。私は人形のようにされるがままでした。思い出して、それを何とか認めるところまで来ても、呆然とはしましたが、それが苦しいのかどうか、悪いことなのかどうかは、わかりませんでした。ただただ、呆然としました。そしてその怖いことが事実だと認める勇気も気力もなく、私は結婚することで事実を蓋をして、現実から逃げようと思いました。

しかし、結婚はうまくいかず、気づけば私には子どもがいました。子どもを同じように

したくなくて、やっと自分を何とかしようと思うようになりました。別居をし、カウンセリングに通いました。精神科も受診しました。そういった環境から離れて数年して、ようやく自分の身におきたことを、かい離せずに受け止めようとしてできるようになってきました。

もう、被害環境から離れて6年目になりますが、まだ悪夢は続いていますし、フラッシュバックが出ることもあります。わけのわからない不安や、苛立ちや、突然襲う猛烈な閉塞感で冷や汗が流れたり、呼吸が出来なくなる瞬間があります。こういった信頼できるはずの親に暴力を受け続けた場合は特にだと思のですが、自分を含めた人間全般を信頼しづらく、信頼関係を築くのが大変難しいです。愛着関係や信頼関係がわからないので、自分の子どもを育てるのも大変で、全部自分で「役割」、「仕事」として引き受けようとし、それができないならば放り出すといった思考、行動をとりがちでした。私は援助してくれる女性団体のスタッフに恵まれ、何とかしのいでくることができました。先駆的な支援を行う女性団体と出会えて本当に幸運でした。そうでなければ、今頃どうなっていたのか想像できませんし、したくありません。けれど、私のようなケースの方がまれで、こういった支援は受けられずにいる人たちはたくさんいるのだと思います。

もしも私が子どもの頃に、親の元で虐待を受け続ける以外の選択、安全に守られ、ケアされる（シェルターに専門のケア機能がついていて、親権者と対抗するような権限を与えられている施設）ことができたなら、ぜんぜん違った人生があっただろうと思うと、のうのうと生きている人たちを全員殺してしまいたいと思うくらいの憎しみが起こることもあります。今後、かつての私のような子どもたちのことを、その子達の将来も含めて考えた支援を作ってほしい、作らなければいけないと思います。